

がごとくに。地藏は衆生の。身がはりに立たまふに。鏡の燃事もなく。疵もつかぬがごとくに。菩薩の身には。苦るしみのなしとおもふ人もあるなり。もつともばさつの。善巧方便なれば。様々なるへし。しかれども菩薩の悲願に約すれば直に其苦に代。身に受と。思召ま本意ならん。夫正法の不思議といつは。外道魔法の術をなして。人を誑とは遠て。涅槃經にハ。慈善⁰⁶ウ根力によると説。華嚴にハ法として。如是といひて。神通定力のなすところ。本よりふしきとする変にあらず。故に正法に不思議なしといへり。たとへば眼前のふしきをいはゞ。紙を御幣板となし。或ハ紙に佛を繪。木にて佛神の御形。および土石膠漆金銀銅鐵等にて。作たる姿をば。人間には生得の。佛性のある故に。我と我が佛性には。おそれをなして。そのかけを踏事にはあらず。又跡にもいたさずして。是を尊む支は。妙の不思議の。正法にあらずや。扱同金銀銅鐵木紙に。佛神の姿のなきをば。人これを貴とまず。佛神の姿の名をつくれば。是におそれをなす事なり。此姿と名に恐をなす徳力の形。その根本の徳ハ地藏たり。さて地藏と弥陀⁰⁷とは。同利益にして。外相は異形なり。地藏觀音もおなし利益となして。六觀音六地藏六道の能化たり。諸佛菩薩の。内證外用のときに。内證ハ皆自性法身。毗盧の全躰として。外用の諸尊は。法王の一言をつかさどり。法界の一門にゐて。本誓志願別々にして。万機を利益したまふに。阿弥陀は。超世の悲願をおこし。地藏は闡提の大誓願をたて。扱眞俗一諦の時は。眞諦は法藏。俗諦は地藏とも。申ならはすなり。因果相即。眞俗不二にあらずや。かるがゆへに。法藏比丘の昔の姿は地藏なり。また六地藏各八相成道にて。四十八願におふずると釈せり。な徳は阿弥陀なり。この道理は。阿弥陀は。名牒不離の。功德を司とりたまふゆへに⁰⁷ウ經に光明名号をもつて十方を撰化すとなり。さて地藏經には。此菩薩を一瞻すれば。百遍三十三天に

生て。天の福を得て。つくることなし。一礼すればなく。惡道に墮る夏なし。地藏は二世安樂の菩薩なり

第三 地藏本地垂迹内外尊像因位之事

夫地藏菩薩の名相は。佛延命經にて。天帝に告て。六の名相をこたへたまふに。六種振動して。延命菩薩ハ。地より出現あるとなり。さて地藏の本名は。南方宝相佛。宝勝佛より。出体の名のゆへに。地藏尊の本體は。如意宝珠たり。地藏の二字。藏は。地より一切の。萬物出生して。衆生の宝となるがごとくに。天地の万物の寶を納て。六道に。施⁰⁸オたまふに。盡期のなきをもつて。地藏といふなり。娑婆にての因位は。過去不可思議。阿僧祇劫のとき。佛有名をば。覺華定自在王如来と申て。その佛世にまします夏。四百千万億。阿僧祇劫の壽命なり。此佛像法の中に。婆羅門女にて。宿福深厚にして。諸天衛護の女人たるに。その母は不信邪見の人たり。此慳貪より。地藏ぼさつの志は發心せり。父は婆羅門種なり。その名戸羅善現と號し。御母は悦帝利と申て。三宝を敬ず。經文を尊ずとなり。さて地藏因位の御名は。聖女とも光目とも。申す時に。清淨蓮華目如来の。像塔の前にて。ひろき誓願を。立たまふに。我盡未來劫に。有罪無罪の衆生を。廣方⁰⁸ウ便を設て。暫も休息なく。衆生に大慈大悲をほどこさんとの夏なり。扱男女地藏菩薩の。名を聞いて。禮拜し。讚嘆せば此人。三十劫のあいだ。罪障を滅するとなり。また地藏ぼさつの形像を。金銀銅鐵土。石膠漆紙に繪がき。彩色いろどりして。一瞻一礼せば。此人は百遍三十三天に。むまるゝ功德を叠て。ながく惡道に墮ずして。天の福力つきても。人間に下生しては。國王となりて。大徳力あり。また女人ならば。女人の身を馱。こゝろの日々に。退ずして。常に飲食。衣服幢幡等をもつて。地藏を供養せんとなり。此女人は百

千万劫。女人の身を轉盡て。さらにもつて。女人の身には生ぜずとなり。地藏菩薩無量無邊の。利益あるとはいへども。別しては父母に。〇九孝のやしないをせず。親の重恩師の。恩徳を知らざる輩に。大悲を生じて。天理天性の。冥利にかなはせて。二世安全の利益を。あたゑんとの事なり

第四 江戸六地藏鑄形木像湯嶋靈雲寺安置之事

江戸湯嶋天神の墓。靈雲寺の地藏は。江戸六地藏銅像の。鑄形の木像にして。六所地藏尊出体の元の尊形たり。此一鉢の尊像は。阿字の一字へんじて出生せり。誠に阿字の本體。不生不滅なれば。ミな人は阿字より出て。阿字にこそいる。さて此木像の因縁は。真言の所化に。元智といふ僧あり。或信心の人の家に。ゆきし所に。其あるじ。或夜靈夢を見たまふに。未二三日もすぎずして。板橋の〇九町近所の寺に。地藏の尊像あるよしをあるじに。元智物語いたしければ。右の靈夢符合せることを感得して。此尊形を求て。安置したまふなり。元智今は覚彦比丘の弟子になりて。名をかへて禪融房といふなり。しかるにかの地藏を。空無契約をなすことは。其頃越後の。五智の如来。雷火に焼させ。たまふよしを。傳聞より。越後の。五智建立の。一念發といへども。彼寺は天台宗にて。他門より再興の志。かなひがたき故に。思とゞまりて。京都の六地藏の。事を思つゞけて。江戸には未六地藏なきゆへに。造立を思立はんへりし。幸に此木像を鑄形として。銅像の六尊出生したまふゆへ。元の尊形をば空無彩色し奉。靈雲。10才寺に寄進せしに。覚彦律師又是を再興ありて。今は阿字變て。阿字の地藏尊と。結構七宝莊嚴の。尊像有かたく拜奉るなり

第五 六地藏建立時靈瑞不思議之事

此六地藏は。貴賤男女道俗を勸て。六錢父宛の助力を以。六鉢の尊像を。

成就せんと願望の所に。空無小者に三助と申ものあり。しかるに諸人志。金銀錢を。春の時分より。秋のころまで。錢箱に合鑰をなして。ぬすみ出けるが。或日の夜に。金銀錢を沢山に。盜ける。空無内に為心是心とて。二人の出家小者二人。互に穿鑿をいたす所に。池の端七軒町名主何某と。小田原町井筒屋三郎。10ウ兵衛。茗荷屋勘左衛門。去方の屋敷細谷八兵衛など。空無家来の。所持の鑰を錢箱に合見ば。右の三助が鑰にて。音もなく錠のあくゆへに。三助一人にきはまりて。赤面いたすとおなじく。鼻血いづるなり。坐敷を立去て。内々盜をく。錢五貫匁ほど柳屋といふ。餅屋に預をく。金銀錢を持て。生國に行とて。板橋まで逃に。地藏の引歸たまふ事は。此六地藏鑄形の木像は。板橋より出たまふゆへに。関とめたまふと見たり。さて三助俄に伊勢參宮の。心出来ることは。日光地藏は。天照大神の本地なれば。日のもと六十六箇國は。日光地藏にも本國なれば。いづくにも行ことならず。途中より三助又江戸に皈。池の端萱町。空無庵の11才近所に。さまよひけるが。日暮の時分なれば。三助非人に行あたりしゆへ。非人三助を突倒なり。その時多の童ども。遊ひけるに三助倒けると等く。子ども見於泥ぼうくと。申たてけるを。所のもの見れば彼三助なり。是非なく三助を。空無方へ連行。其時まへかたの穿鑿の人々は。三助ぬすみ取おきし。金銀錢を穿鑿いたし。春より盜取ためし。遺餘を取返し追出しけり。それより牽人となりて。終に乞食となるものなり

第六 巡六地藏一番之利生靈驗之事

駒込淨土宗。桂芳山瑞泰寺の。檀陀地藏と申なり。此地藏は。柄香爐と御經を持たまふなり。地獄道の能。11ウ化にして。檀陀地藏とは。天竺の言葉なり。是を人頭といふなり。此人頭は琰魔の廳に。人頭幢あり此人頭